

循環器診療 それ、ホント？

循環器診療は、医学のなかでも特にダイナミックに変化し続けている領域の1つです。新しい病態理解や治療法が次々と登場し、これまで「常識」とされていたことが、数年のうちに「非常識」になることも珍しくありませんでした。

たとえば、かつて冠動脈疾患といえば「ただちにカテーテル」というのが半ば合言葉のように語られていましたが、現在では「まずはLDLコレステロール値を可能な限り下げる」という戦略が重視されるようになっていきます。また、心不全治療の中心も、長らく利尿薬による症状緩和が第一と考えられてきましたが、近年では診療ガイドラインに基づく至適薬物治療（GDMT）が予後改善の柱として位置づけられています。こうした変化は、教科書的な知識や臨床経験だけではカバーしきれない、まさに日進月歩の世界です。

今回の特集は、このような変化をいち早く現場に届けるべく企画しました。雑誌という速報性のある媒体だからこそ、最新知見を単に列挙するのではなく、実臨床に直結する「判断の軸」として提示することを目指しています。

特集のフォーマットの着想は、2015年に帝京大学の松永直久先生が本誌で組まれた特集『感染症診療 それ、ホント？』（52巻6号）に根差しています。日常診療で誰もが抱く「素朴な疑問」を切り口に、実践的かつ明快な解説が示され、当時、大変な反響を呼びました。本特集もその流れを継ぎ、循環器診療に携わる若手～中堅の内科医の皆さんに、大変僭越ながら「知っているつもりの常識をもう一度見直す」契機を提供できればと考えています。

内容に関しては、執筆者の先生方に「そのテーマはホントか、ホントではないのか」を冒頭で明示いただくことに大きな特徴があります。つまり、読者の皆さんが論文を読み進める前に「前提」が提示される構成です。そこから先は、最新のエビデンスや現場の経験をふまえた解説を読みながら、「果たして自分ならどう判断するか」

を考えることができます。なかには「必ずしもホントではない」という答えにたどり着くトピックも含まれています。タイトルのキャッチーさに惑わされず、ぜひ本文まで踏み込んで読んでいただきたいと思います。

循環器診療の魅力は、緊急性と重症度の高さ、そして治療が患者の予後に直結するというダイナミズムにあります。同時に、最新エビデンスの解釈や、過剰診療を避けるための冷静な判断も求められます。今回の特集を通じて、読者の皆さんに日々の臨床における「判断の勘所」を再確認いただき、診療に役立つ新しい視点を加えていただければ幸いです。



香坂 俊

慶應義塾大学医学部 内科学（循環器）
慶應義塾大学病院 国際診療部
日本医療研究開発機構
横浜市立大学 データサイエンス研究科